

ペルー大統領選挙とクチンスキー次期政権の展望

中川原 拓海

はじめに

6月11日午後、決選投票に残った候補の一人であるケイコ・フジモリが、「責任ある野党となる責任を国民から委ねられた。」という言い回しで、事実上の敗北宣言をしたことにより、5年に一度のペルー大統領選挙は終わりを告げた。ケイコは選挙の1年以上前から30%台の支持率を維持し、4月の第1回投票では、後に決選投票で勝利することになるペドロ・パブロ・クチンスキーにほぼ倍の差をつけていた。決選投票が僅差の争いとなることは予想されていたが、それでも決選投票の1週間前の時点ではケイコの当選がほぼ確実と見られていた。しかし、蓋を開けてみれば、票数にして約41,000票、有効得票率にして0.240%という僅差でケイコは落選した。

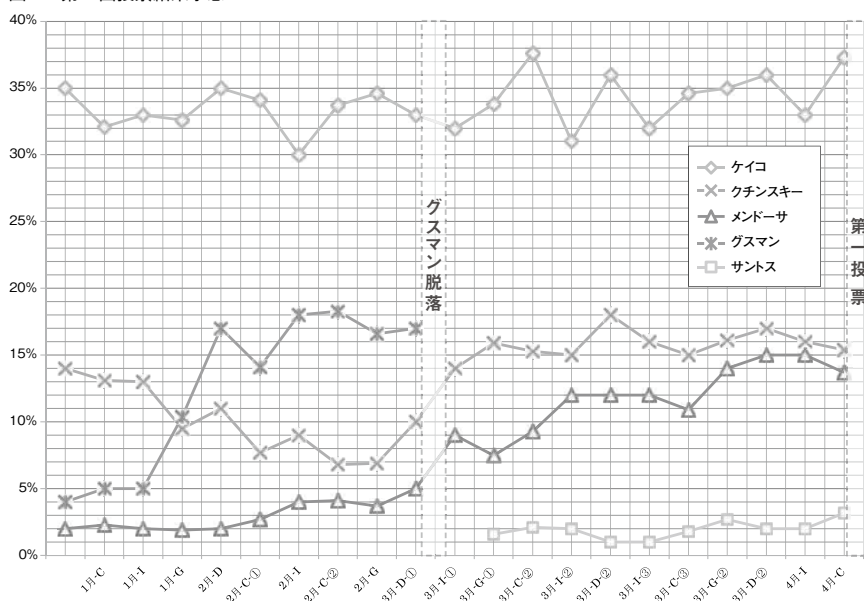
ライバルの台頭により、一時は決選投票への進出も絶望視され、キャンペーンの質も酷評されていたクチンスキーが当選し、ケイコが落選した背景には何があったのか。本稿では、クチンスキーが薄氷ながらも決選

投票に進出し、ケイコ有利の予想を覆して大統領に当選した経緯を振り返る。その後、駆け足ながら、2016年7月28日に発足するクチンスキー次期政権が置かれる状況を概観する。

第1回投票：何とか逃げ切ったクチンスキー

ペルーの大統領選は一度目の投票で有効投票の過半数以上を獲得する候補がいない場合、決選投票が行われる。事前の世論調査でケイコは支持率首位を独走しており、一度目の投票で勝利はできないが、決選投票進出は確実視されていた。そのため、4月10日の第1回投票の主な関心事は、決選投票でケイコの相手になるのは誰かという点であった。2位争いをしていたのは、首相と経済財政大臣経験のあるクチンスキーと35歳の若手国会議員、ベロニカ・メンドーサであった。メンドーサは南部クスコ州の出身で、母の母国であるフランスで大学に通っていた時期に、当時在仏ペルー大使館駐在武官であったウマラ大統領夫妻と知り合い、ウマラ

図1 第1回投票結果予想



注：D=Datum社、I=Ipsos社、C=CPI社、G=GfK社。円内の数字はその月の世論調査実施回数。
出所：各社ホームページ掲載のデータを基に筆者作成

大統領が後に組織する国民主義党から 2011 年に国会議員に当選した。

クチンスキーとメンドーサによる 2 位争いは最後までもつれた。その主要因の一つとしては、一時破竹の勢いで支持率 2 位に浮上したフリオ・グスマンという候補が失格となったことにより、支持先を失った票が生じ、その票がどの候補に流入するか見通しがつきづらかった点が挙げられる。選挙序盤まで遡ると、クチンスキーは、10% 台中盤から後半の支持率を維持していた。しかし、1 月以降急伸したグスマンに票を奪われ、2 月には決選投票進出が困難とされるほど支持率が下降する（図 1）。逆境に立たされたクチンスキー陣営は、選挙参謀や広告業者を交代するなど陣営内の配置転換を余儀なくされた。3 月上旬、グスマンが、党内での大統領候補選出にかかる規定に違反したことにより失格となった後、クチンスキーはグスマンに流れていた票を取り込み 2 位に再浮上するが、以前の支持率を回復する以上の上積みはできず、支持基盤の限界を露呈した。陣営内の配置転換の効果が感じられることもなく、キャンペーンに創造性が乏しい、陣営にまとまりがない、固定票を有していないといったネガティブな評価は相変わらずであった。

そんな中、グスマンの脱落で空白となった票の一部を取り込み急激に支持を伸ばしたのがメンドーサであった。メンドーサは、グスマンの去就が不透明になってきた前後から徐々に支持を伸ばし始め、3 月にはクチンスキーのすぐ背後まで迫った。このように支持率 2 位に返り咲きはしたが伸びしろに限界のあるクチンスキーとメンドーサの勢いを比較して、メンドーサがクチンスキーを追い抜いて決選投票に進むのではないかとの見方が強まっていた中で第一回投票を迎えた。

結果的にはクチンスキーが 2.31% 差で逃げ切り決選投票に進むことになる。クチンスキー逃げ切りの主な理由としては、90 年代から続く自由主義経済路線に批判的なメンドーサに危機感を抱いた有権者が、現行経済路線の踏襲を唱えるクチンスキーに戦略票を投じたこと、クチンスキーと元カハマルカ州知事のグレゴリオ・サントスがメンドーサ優位と見られていた州で健闘したこと、ウマラ大統領夫人の資金洗浄に関与していたとする疑惑が、クリーンなイメージを掲げるメンドーサにダメージを与えた、といった見方がなされた。薄氷ながらも決選投票に進んだクチンスキーであったが、このような戦略票の動きが示すとおり、クチンスキーへの純然たる支持よりも「メンドーサよりはマシ」とい

う理由により決選投票に進んだこと、また、クチンスキーが最多得票を得たのは全 26 選挙区中 1 選挙区（州）だけであったということから（表 1）、決選投票ではケイコ有利という見方が大勢であった。

一方のケイコは、2 位のクチンスキーにほぼ倍の差をつけての決選投票進出が高く評価された。第 1 回投票におけるケイコ「勝利」の主要因としては、2011 年大統領選でウマラ現大統領に破れて以来延べ 5 年、今次選挙を見据えた地道なキャンペーンを継続し支持基盤を拡大してきたこと、ライバル陣営の挑発に乗らず、粛々と自分のキャンペーンに集中したこと、ケイコ批判の口実にされる父のアルベルト・フジモリ政権時代の汚職、人権侵害、強権政治といったネガティブなイメージからの脱却を図るため、フジモリ政権時代の負の側面を認め、古株国会議員の議員選再出馬を見送ったことなどが挙げられた。

表 1 第 1 回投票結果（有効投票）

（単位：%）

	ケイコ	クチンスキー	メンドーサ	サントス
全国	39.86	21.05	18.74	4.00
アマソナス	43.73	11.89	22.13	9.49
アンカッシュ	42.62	15.78	21.64	0.70
アプリマック	30.98	5.62	50.25	4.16
アレキパ	24.04	27.33	25.67	3.81
アヤクチョ	32.37	6.20	52.77	1.39
カハマルカ	32.08	8.51	10.18	40.68
カヤオ	40.46	28.02	11.25	0.78
クスコ	21.76	9.69	46.65	5.64
ワンカベリカ	28.79	9.44	53.06	1.67
ワヌコ	38.97	13.87	30.06	0.87
イカ	44.74	15.91	17.59	0.76
フニン	43.44	21.20	22.45	1.27
ラ・リベルター	49.43	13.86	10.40	2.59
ランバイエケ	50.55	15.91	10.90	2.73
リマ	40.56	29.78	12.03	0.71
ロレト	41.24	24.73	15.68	1.00
マドレ・デ・ディオス	44.34	9.35	25.03	4.20
モケグア	24.37	27.92	31.46	1.54
パスコ	43.45	22.16	20.44	0.77
ピウラ	55.00	12.63	15.41	3.08
プーノ	22.94	8.57	38.57	19.96
サン・マルティン	48.47	12.70	21.17	2.75
タクナ	21.04	15.68	41.22	4.89
トゥンベス	64.52	12.15	10.89	0.59
ウカヤリ	52.71	14.63	16.89	0.99

注：色つきのセルはその州で候補中最高得票を獲得したことを示す。

注：リマは (1) リマ州と (2) リマ市及び在外という 2 つの選挙区の合算。

注：サントスは得票率 6 位。4 位はバルネチア（6.97%）、5 位はガルシア（5.83%）。

出所：ONPE（全国選挙過程事務所）のデータを基に筆者作成

精力的なケイコと冴えないクチンスキー

決選投票に入って注目を集めたのは、第1回投票まではライバル陣営の挑発に乗ることもなく、積極的に攻撃することもなかったケイコが、クチンスキーに対する攻撃的な姿勢を前面に出したことであった。加えて、クチンスキーの方が自陣に有能な人材を豊富に揃えているというイメージが浸透していたが、ケイコが政策面で期待できる著名なエコノミストを自陣に引き入れたことで、人材面でもクチンスキー陣営に見劣りすることはなくなったとの声も出始めた。このような変化があった一方で、精力的に各地でキャンペーンを行うスタイルは終始貫き、第1回投票からほぼ休みを取らず、リマ市内の貧困地域や地方を中心に選挙活動を行った。

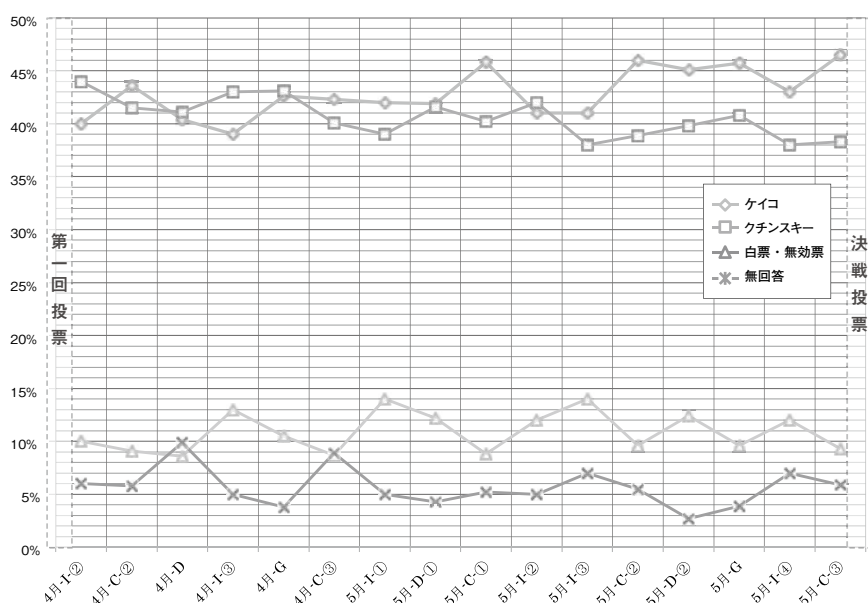
一部世論調査では、クチンスキーの大統領当選を予想する結果も出ていたが、決戦投票に入ってからクチンスキーのキャンペーンは改善せず、「反フジモリ」を軸に浮動票を取り込むような強いリーダーシップを見せることもなかった。クチンスキーは、富裕層と中間層からの支持ではケイコを上回っていたが、有権者人口の比率が最も高い貧困層についてはケイコが優勢であった。クチンスキーには、かねてから77歳と高齢であるが故に大統領の激務に耐えることができるかという懸念が付きまとっていたが、その懸念を払拭するようなエネルギーをアピールすることもなく、欧米系の風貌と財界エリートのイメージから、庶民層にとっては親近感を抱きづらかったことなどが不支持の理由に挙げられていた。

ケイコが着々とキャンペーンを進め、クチンスキーに決め手がない中、5月の半ば過ぎ、世論調査でケイコがクチンスキーをリードし始め、両者の差が開き始める(図2)。この変化は、強盗や殺人事件が連日報道で大きく取り上げられたことで、クチンスキー支持になびいていた浮動票が治安対策への期待が高いケイコ支持に回ったためと分析された。この頃、それまではクチンスキー優勢であったリマ市でもケイコがクチンスキーをリードするようになった。決選投票の一週間前の世論調査では、ケイコがクチンスキーを44～9.6%(有効得票率)リードしており、ケイコが重大なミスを犯さない限り勝利するという雰囲気の中決選投票を迎えた。

決戦投票：なぜケイコは負けたのか

では、なぜケイコは敗れたのか。なぜ当選確実の状況からクチンスキーに逆転されたのか。直接的には、ケイコの党(人民勢力党、以下FP)幹事長の資金洗浄疑惑と同伴に関するFP副大統領候補による情報操作疑惑の浮上が原因であったとされている。遡ると、ケイコがクチンスキーをリードし上昇気流に乗る陰で、FP幹事長のラミレスが、以前から疑いのあった資金洗浄疑惑で米国当局の捜査対象となっていることが報じられた。同報道をきっかけに、FPの次期国会議員の中に資金洗浄疑惑がかけられている人物がいることがクロズアップされた。クチンスキーやその協力者はこの失態に乗じて、「(資金洗浄は麻薬密輸と密接に関連しているため)ケイコが当選するとペルーは麻薬国家になる。」という強力なイメージ戦略を展開した。

図2 決選投票結果予想(4～5月)



注：D=Datum社, I=Ipsos社, C=CPI社, G=GfK社。円内の数字はその月の世論調査実施回数。
出所：各社ホームページ掲載のデータを基に筆者作成

この流れに拍車をかけたのが、FPの副大統領候補クリンベルによる情報操作疑惑であった。クリンベルには、ラミレスの資金洗浄を裏付ける証人の証言を虚偽に見せかけるため、この証人の発言が記録された音声データを改ざんしてテレビ局に放送させたのではないかとこの疑惑がかけられた。本件の影響でフジモリ政権によるメディアを通じた情報操作が想起される結果となり、ライバル陣営が唱える「ケイコの当選はフジモリ政権の再来」というイメージに説得力を与えてしまうことになった。ケイコに対しては、以前から資金洗浄疑惑があったにもかかわらず、ラミレスを幹事長に留めておいたリスク管理の甘さが指摘された。これらに加えて、メンドーサをはじめとする元大統領候補が、ケイコの当選阻止を優先する立場からクチンスキー支持を呼びかけたこと、忤えなかったクチンスキーが最後の最後で上記のような積極的なネガティブ・キャンペーンを仕掛け、「ケ

イコよりはマシ」という立ち位置を得たことなどが二次的な要因として挙げられている。要するに、このようなライバルによる動きはあったにせよ、ケイコ陣営の失態がなければ、さほどの影響はなく、クチンスキーの逆転勝利もなかっただろうと評されている。

おわりにークチンスキー次期政権が置かれる状況

クチンスキー次期政権は、ガルシアやウマラとは違い、経済の停滞や治安の悪化という悪天候の中船出を迎える。経済と治安の改善という国民が求める課題を構造的に解決するには、国会を掌握するFP（表3）との交渉や協力は不可避と見られている。決選投票におけるネガティブ・キャンペーンの応酬でケイコとクチンスキーの間にはしこりが残っているとされているが、国民が早急な成果を求める経済と治安の改善に向けて、与野党間で最低限の合意を見出し、次期政権発足直後から素早い取組みができるかどうか注目される。内政の安定を得るためには、クチンスキーがこのような国民の要望に具体的な成果で応え、盤石ではない世論の支持を維持することで野党の圧力をコントロールしながら、政権運営に打ち込める環境を作り出すことが必要となろう。

表2 決選投票結果（有効投票）

（単位：%）

	第1回投票		決選投票	
	クチンスキー	ケイコ	クチンスキー	ケイコ
全国	21.05	39.86	50.120	49.880
アマソナス	11.89	43.37	47.522	52.478
アンカッシュ	15.78	42.62	48.857	51.143
アプリマック	5.62	30.98	52.060	47.940
アレキバ	27.33	24.04	67.584	32.146
アヤクチョ	6.20	32.37	48.412	51.588
カハマルカ	8.51	32.08	50.076	49.924
カヤオ	28.02	40.46	49.951	50.049
クスコ	9.69	21.76	64.987	35.013
ワンカベリカ	9.44	28.79	56.785	43.215
ワヌコ	13.87	38.97	49.008	50.992
イカ	15.91	44.74	47.221	52.779
フニン	21.20	43.44	48.821	51.179
ラ・リベルター	13.86	49.43	38.907	61.093
ランバイエケ	15.91	50.55	41.146	58.854
リマ	29.78	40.56	50.121	49.879
ロレト	24.73	41.24	53.853	46.147
マドレ・デ・ディオス	9.35	44.34	36.275	63.725
モケグア	27.92	24.37	67.940	32.060
バスコ	22.16	43.45	50.001	49.999
ピウラ	12.63	55.00	38.968	61.032
プーノ	8.57	22.94	63.131	36.869
サン・マルティン	12.70	48.47	44.206	55.794
タクナ	15.68	21.04	68.755	31.245
トゥンベス	12.15	64.52	29.418	70.582
ウカヤリ	14.63	52.71	39.682	60.318

注：色つきのセルはその州で候補中最多得票を獲得したことを示す。

注：リマは(1)リマ州と(2)リマ市及び在外という2つの選挙区の合算。

出所：ONPE（全国選挙過程事務所）のデータを基に筆者作成

表3 次期国会議席配分

会派（今次選挙で擁立した大統領候補）	議席数
人民勢力（ケイコ・フジモリ）	73
正義・生活・自由のための拡大戦線（ペロニカ・メンドーサ）	20
変革のためのペルー国民（ペドロ・パブロ・クチンスキー）	18
ペルーの進歩のための同盟（セサル・アクーニャ）	9
人民行動（アルフレド・バルネチェア）	5
人民同盟（アラン・ガルシア）	5
合計	130

出所：6月1日付官報掲載のデータを基に筆者作成

（本稿は、2016年6月20日時点の情報を基に作成したものである。本稿の内容はすべて筆者自身の観点に基づく私見であり、所属する組織の見方を代表するものではない。）

（なががわら たくみ 在ペルー日本国大使館専門調査員）